

加藤佑治常任理事の死を悼む

黒川 俊雄

労働運動総合研究所の常任理事として、また本誌「季刊・労働総研クォーターリー」の編集責任者として、設立以来昨年一杯まで活躍して来られた加藤佑治君が突然帰らぬ人となってしまった。病に倒れたと聞いても回復してまた活躍するに決まっていると皆思っていただろう。

想えば、加藤君と初めて会ったのは私の処女作『賃金論入門』が1956年に青木書店から出版されたときであった。その「はしがき」に「編集部の加藤佑治氏に大変迷惑をかけてしまった」と記されている。その後加藤君は専修大学大学院を修了されて同大学で研究教育に専念され、彼が1970年に処女作『日本帝国主義下の労働政策』を御茶の水書房から出版されるとき、文部省の出版補助を取ることで及ばずながらお世話したことを思い出す。

すでに1964年に全日本自由労働組合が主催し、私もその一員となった失業問題研究会に加藤君も参加されたが、前述の処女作出版後、不安定就業者の実態を究明することに専念され、江口英一先生を中心とする山谷地域の日雇労働市場の実態調査に参加され、建設業労働者、鉄鋼業を中心とする社外工、不安定就業者の多い婦人労働者の実態分析を進められ、1980年、82年に大著『現代日本における不安定就業労働者』の(上)、(下)を公刊された。

その後1989年に労働総研が設立されて私も代表理事の一人となったが、加藤君も常任理事として前述のように「クォーターリー」の編集責任者として苦勞されながら、不安定就業問題研究部会の責任者として多くの研究者とともに研究業績をまとめた書物を次々と公にするために尽



力された。しかも社会政策学会の幹事としても活躍され、代表幹事となり、以前に代表幹事を勤めた私も何かと相談を受けた。

このようにふりかえてみると、彼と私との縁は長く深いものであった。いまだに彼は生きているように思えてならない。彼の研究への情熱を受け継いで労働総研もこれから大いに飛躍することを誓って御冥福を祈る次第である。

(代表理事・慶応義塾大学名誉教授)